

いぼし

違星北斗の昔話

違星北斗研究会・編

【目次】

世界の創造とねずみ（清川猪七翁談 文責 北斗）

ローソク岩と兜岩

半分白く 半分黒い おばけ（バチラー八重子伝承 文責 北斗）

郷土の伝説 死んでからの魂の生活

パシクル イカシ
烏 と 翁

林檎の花の精

熊と熊取の話

熊の話

（注）

※できるだけ原文を尊重する方針ですが、多くの人に読んでいただけるよう、原文の旧仮名遣いを現代仮名遣いに改めています。

※読みやすくするために改行や空白、句読点を加え、読みにくい漢字をかなに開いたりルビを加えているところがあります。

※アイヌ語の単語については、違星北斗の用いた表記法を尊重しています。
そのため、よく知られている表記とは異なる場合があります。

世界の創造とねずみ

(清川猪七翁談)

文責

北斗

世界は元と海もなく岡もなく、雲の様な泥の様なものでありました。

天上大神が黄金のよしで突つきました。

すると水が一つところに集まり、土が土でまた固りました。

そして干きあがりまして、水の洋々としてゐる処は海となり、

岡は陸となりました。

万物判然と現れ、そして世界の創造が全部出来あがりまして。

この世界を支配する神様が天上からお降りになることになりました。

ところが悪神がありました……(この神様は何んでも反対するし、また外の神様をねたんだり羨んだりする悪い神威)……心密かにこの世界を自分のものにしようと、悪計をしました。

そして、

「私がモシリを治めましょう」

と、言い出しました。

「イヤ、私は天上大神の命で支配するのです」

と申しましても悪神はなかなか剛情で聞き入れません。

よい神様もほとほと困ってしまいました。

どちらも、ゆずり合わないので果しがつきません。

こういう時、ウヌプルパップへと云って術くらべ、あるいは智慧くらべ、をやつて、あらそいの勝負を決定することになります。

そこで、よい神様と悪い神様と、ウヌプルパップをやることになりました。

「では私は先ず始めましょう。

いり豆を畑に蒔きます。

この豆に花が咲き、実が結ばなかつたら、私は負けます。

けれど、もし成功したら、貴公は私に服従しなければなりません」

と、悪神は問題を出しました。

正しい神様は今は、いやとも言われず、それに賛成することになりました。いった豆だから、よもや生えようとは思いませんでした。

ウエンカムイ
悪神は、豆をいりました。

そして畑にまきました。

すると驚くではありませんか。

件のいり豆が、ぽつぽつ芽を出し始めました。

よい神様は、サア大変だ。これではならぬと、大そうご心配になりました。

このままに捨て置いては、あの豆がやがて成なるであろう。

今負けては悪神ウエンカムイにこの世界が自由勝手にもてあそばれてしま
う。

はてどうしようかと、腕をくんで思案しあんしていました。

折柄おりがら、一匹のねずみが、ちよろちよろと出て来て、

「ご心配には及びません。

私がこれからあの豆を皆、根を食い切つて参ります」

と云い去りました。

ねずみは遠くよりトンネルを掘つて行きました。

そして悪神ウエンカムイのまいた豆を、一つ残らず根を食ひ切つてしまいま

したので流石さすがの豆も全部枯かれてしまいました。

悪神ウエンカムイは遂ついに負けました。

よい神様カムイさまは大そうお喜びなさいまして、かのねずみを大そうお
ほめになりました。ごほうびとして言い渡しました。

「ねずみよ、お前はよく働いてくれた。

今度のほうびとして、お前達はこれから人間の物を喰ふ事を許

可ゆえする 故ゆえに 人間のこしらえたものなら、何でも遠慮えんりよなしに食

いなさい」

よい神様カムイさまのお為ためめになったねずみは神カムイに許され、今になお人

間の物をくつて生きています。

……
（ですからねずみをむごたらしい いじめ方、あるいは殺
しかたをするものではないそうです）……

……………

モシリ よ カムイさま
世界は善い神様をいただきます。（完）

（子供の道話 昭和二年一月号）

ローソク岩と兜岩

「あれ！ 赤い火が沖を飛ぶ、

ほのお 焰のように乱れ飛ぶ。

ズーと列をなして、沖の方へ飛んで行く。

早い、早い、実に早い、何だろう。

この暴風雨に海へ出ている舟もなかりうに……。

不思議だなア……。」

余市町に近い寂しい海辺、星一つない真つ暗な沖合いに、赤い

一列の灯が乱れ飛ぶのを見ながら、村の者は物の怪につかれたよ

うに、恐れ騒いでいた。

この村に勇敢な若者があつた。

赤い灯が飛んだ夜……、彼は不思議な夢を見た。

美しい月夜だった。

彼は沖へ出て釣りをしていた。

グイグイ強い手応えと共に竿を上げようとしたが動かぬ、あせ

ればあせる程、彼は強い力で底の方へ、グングン引かれ、いつの

間にか、彼は底知れぬ深い暗いところに引き入れられるような気

がした。

彼の前には大きな岩の門が立っている。

彼は入って見た。

そこには彼の空想だにしたことのない素晴らしい壮麗な城があった。

二匹の大きな魚が門の両側に楯を持って立っていた。

そして彼をうながした。

奥に入ると広い、恐ろしく立派な部屋に出た。

そこに微笑んで立っている美しい女を見た。

華やかな装い。よそお

しかしどこかに愁色しゅうしよくが漂ただよっていた。

「人界の御殿おとのとお見受け申します。

わたしはこの奥の王城の女神ですが、どうか折り入って私の願いをきいて下さい。

そしてあなたのおちからおちからの御力を貸して下さい。」

こう云った女神の懇うったうるところに依よれば、ここ十数日 毎夜毎夜、海の怪獣が列をなして押し寄せ、王城の魚を奪うばって行く。

男の神様でも居おれば退治することも出来ようが、生憎遠国へ出かけて留守だから、あなたのお力でその怪獣を退治してくれ、成功すればお礼として毎年夥おびただしい銀色の鯨にしんをあなたの村へ贈るというのである。

「ハテ不思議だ。さてはあの赤い灯は怪獣の行列であつたか。日頃夢など信じたことのない彼ではあつたが、この時ばかりは

この夢が妙に気になって仕方がなかった。

何だか不思議な予感が波立ったのであった。

その日 村の農夫が耕やしていると、何か硬いものがカツンと鍬くわにあたった。掘り返して見ると、立派な青銅造りの兜かぶとと氷のような剣だった。

土の中にあつたにも拘かかわらず、剣は不思議にピカピカ光っていた。

「これはデツカイものを掘り出した。」

噂うわさを聞いて若者は、カムイの使者に聞いた。

「これはあの女神があなたの勇気を頼んで、この不思議な武器を下さつたのじゃ。」

若者の怪物に対する恐れは、この一言で全く消え去つた。

彼はその厳いかめしい武器を見た刹那せつな、何んとなくその武器をもって力の限り戦つて見度みたい心が、漲みなぎり湧わくのを覚えた。

数日の後、選よりすぐつた三十人の勇士が熊の皮に身を固め、手に槍を持って勇しく浜を船出ふなでした。

船頭には神秘の兜をつけ、降魔ごうまの利剣りけんをひらめかした若者の姿が雄々おおしく見られた。

舟は余市の沖を北へ北へと進む。

月は既に落ちて月のない大空には北極星が寂しく光っていた。

彼等は赤い灯を……真つ暗な海を一行に乱れ飛ぶ不思議な灯を

待った。

その時、東の方に一点の赤い灯がポツカリ浮んだ。

一つ、二つ、三つ、灯は忽ち数を増し、夥しい列をなして、真一文字に乱舞し、旋回しつつ押し寄せて来た。

そして恐ろしいこの世のものとも思えぬ叫声をあげながら、物凄い勢いを以って船に肉迫して来る。

剣は暗に閃く、槍は流れる。

矢は波頭を切って飛ぶ。

恐ろしい戦いは始まったのだ。

若者は靈剣を滅法に振り廻したが、何の効果もなかった。バタリバタリ凄まじい音を立てながら、味方の漁夫は船から海

へ怪獣のために斃されて行く。

若者は死者狂いだった。

怪獣は益々その狂暴な底力を発揮し暴れ廻る。

その時叫喚の音の絶え間に鋭い声が彼の耳を打った。

「剣を潮にひたせ、その剣を」

彼は夢中になって剣を海中に入れた。

時しも怪獣の一つは恐ろしい力を以って彼の首を引き抜こうとする時だった。

不思議なるかな、この時剣は急に灼熱して光りを増した。

と思うと、怪獣は奇異な叫びを発して、何処ともなく退却した。かくして戦いは終わった。

海は静まった。

しかし何んたることであろう。

若人はそれから村には姿をみせなかった。

その事件があつて五日目であつた。

一人の男が

「オイオイ、皆来イ！」

眠りから覚めた人達は彼の指さす方向を見た。

不思議にも若者がかぶっていた赤銅の兜がポツカリ浮いている。

そして更に不思議なことには、彼の腰にさしていた剣は突き立っているではないか。

このことがあつてから、余市は毎年のように鯨が押し寄せて村は豊かにすごすことが出来た。

一方を兜岩、一方をローソク岩と村人は呼んでいるが、それは怪物を退治した記念の兜と剣の化石である。

半分白く 半分黒い おばけ

（バチラー八重子伝承） 文責 北斗

二人の兄弟がありました。

兄あにさんは強くて大きくて元気のよい方かたでした。

弟は生れつき体が弱くて兄様ほどの元気はなかったですけれども、正直で親切な弟は村コタンでは評判者ひょうばんものでした。

お母さんの言ことづ附つけもきかない兄は遊んでばかりいまして、水をくむのも、お使つかいに行くのも皆みな、弟がさせられました。

こうして生長せいちようするにつれて、兄はだんだん悪わるくなりまして、毎日お酒を呑のんで遊んでいました。

もう村では、

「アア、あれか、あれはもう、どうにもこうにも手の附つけようのない男だ。酒を呑んで、けんかばかりする。あんな者はとても相手にされたものではない」。

と爪つまはじきしました。

可愛あそうに弟は弱いからだをいとわずに、或ある時は熊とも闘たたかわねばなりませんでした。

又またある或ある時は巨濤おおなみを乗切のりきってシリカツプの漁に出る。

マレットプ（ホコ）をひっさげてチイップ（鮭）をとり川にゆくのです。

兄の姿は見えませぬ。

丈夫でない弟にこんなに骨折ほねおらしている兄には、この村コタンではお友達一人もなくなつたのです。

それでもちつとも憎めなかつた兄おも思いの弟は、一番仲なかのよいお友達でしたのです。

しかし兄にはこれをそうとは思いませんでした。

こんな弟がいるから、世間では俺を相手にしないのだ、いまいましい弟だと、自分のいけないのを考えないでひそかに恨うらんでいました。

ある日のことです。

いままでにない程ほど親切に、

「弟よ、今日は釣りに行こうではないかと申もうしました。

海も静しずかだ、天気もよいし、いつになく機嫌のよい兄の顔を見て、弟は悦よろこで賛成さんせいしました。

それから川を下って海に出ました。

例によつて弟は一生けんめい車くるま権がを漕こぎます。

アシタポで舵をとっている兄は、まるでお客様のようにかまえ

ていて、

「まだ行こう、もう少し行こう」

と、弟にばかり漕がしています。

沖へ沖へと半日、ただ進ませています。

もう自分達のコタンがみえなくなつて高い山だけが遠く小さく水平線にみえるだけでした。

こんなに沖に来て一体なにするだろうと、弟はそろそろ心配になつた。

けれども一向平氣いっこうで兄は尚も先なおへ行こうとします。

其その日の夕方にやつと一つの島に着きました。

兄、「お前は一寸ちよつとの間ここに待っていてくれ。すぐ迎えに来るか
ら」

弟を上陸さして兄はどっかへ行つてしまいました。

何程待なにほどついても更さらに迎えに来ないのです。

すっかりくたびれた、お腹もすいた、日も暮れかかったので。

それでも、今にきつと迎えに来るだろう、と信じていました。

そして腰からタバコ入れを取出とりだして、煙管きせるをくわえ、パクリパ

クリと喫すつっていました。

その時、一陣いちじんの風と共に、岩かげより大きな人間が現れました。

と、見れば、これはまた不思議なことには、その巨人は半分は

真っしろ
真白く半分は真黒い顔をして、半分白く半分黒い着物を着て、弟の傍そばにづかづかとやって来ました。

やさしい弟はこの怪物をみて怖れるよりも不思議で耐たまりませんでした。

自分が今まで喫のんでいた煙管を一寸ちよっと袖そででふいて、そのおばけに

「お喫のなさい」

と、差出さしだしました。

そのおばけは、だまってその煙管きせるを受取うけとって、おもむろに一ふく喫すつて、怖い相貌そうぼうをくずしてニツコリ笑いました。

そして、

「俺は元より怪物である。

お前を喰くいに来たのである。

お前の兄に頼まれたから喜んでお前を喰殺くいころすつもりで来たのである。

けれども、お前は実にやさしい人間だ。

罪もないお前を殺すのは可愛相かわいそうである。

俺は半分は白く半分は黒いが、これは半分は良心半分は悪心の魔まであって、半年は悪魔の尤もつとも猛烈もうれつな時であり、半年は幾分良心いくぶんに引かされて魔性のゆるやかな時である。

お前ももう四、五日も遅れて来たなら、とても助けられもせない
のであるけれども、ちようど丁度良い時に来たものである。

親切で正直なお前の心に免じて助けてあげましょう。

サア、俺の帯をつかんで歩いて来なさい」

と、申しました。

仕方なしに云れるまま怪物の後について行きました。

とても歩くのが早くて早くてまるで飛んでいる様です。

こんな断崖はどうして昇れようと思う様な処でも、何の苦なし
に上がられます。

そして大きな岩屋に着ました。

件のおぼけは声をひそめて、

「今暫らくここにかくれていなさい」

と、うす暗い物かげに隠してくれました。

どうなることかと心配しながら、じっとしていましたら、怖ろ
しい風音してどっからともなく悪魔が集って来ました

「アア良い匂がするネ」

「人間臭い、良い匂だ」

怖くて恐ろしくて耐まらないのですけれど、そっとすき見しま
すと、これはこれは半分白く半分黒いおぼけの群れです。

するとさい前のおぼけは、

「ウン、人間臭くさいのも道理ど理だ。

さつき人間の村コタンから飛んで来た鳥バシケルが屋根の上でなっていた。
それだから人間臭いのだ」

「そうかい、ナアーンダ」

「がっかりするネ」

「またも大きな風音と共に帰った様子です。

「サア、もう大丈夫だ、出ていらっしやい。

「そうだそうだ、お腹がすいているだろう。

「よしよし待っていていなさい、今ごはんを進しんぜよう」

と、半分白く半分黒い大きなお鍋に、半分白く半分黒いお米アマムを煮
ました。そしてお膳もお椀もおはしも、ことごとく半分白く半分

黒いものづくしです。沢山ご馳走になり、その夜は安心して一泊
しました。

あくる日でした。

「お前の兄は太たいそう悪い者であるが、それに引替ひきかえ弟はなかなか
感心であるから、良い宝物を授けてあげるにより大切に保存せよ。

村に帰ってもそのやさしき心をなくせない様ようにしていなさい。此
の寶たからさえあれば一生幸福に暮せるであろう」（宝物は何であるか
不明）

「誠まことに有難ありがとう存じます」

と、おし戴いたきました。

その日のうちに送られて帰りました。

驚いたのは兄です。

コタン ウタリ
村の同族に、

「弟は舟から落ちて行先不明になった」

と、よい加減な事を云っておいたのが、ふいに帰って来たので
す。村の人は大そう悦よろこんで迎へました。

それからと云うものは弟は益々評判がよく幸運が続くのみでし
た。

つくづくと考えた兄は、羨うらやましくてなりませんでした。

其その後、ひそかに、かのおばけの島にと舟出ふねでしました。

けれどもそれつきり兄の消息を知る人はありません。

二度と村に帰って来ない兄はどこでどうなったでしょう？

.....

正直で親切な弟はそれからと云うものは本当に目出度めでたく栄えま
した。

(オワリ)

(ウイベケレには兄弟の名が現われていませんでした)

郷土の伝説 死んでからの魂の生活

海の幸、山の幸に恵まれて何の不安もなく、楽しい生活を営んで居た原始時代は、本当に仕合せなものでありました。

イヨチコタン（余市村）は其の頃、北海道でも有名なポロコタン（大きな村）でした。

此の樂園にも等しいイヨチコタンに、淋しい淋しい思で日を暮して居る、たった一人の若い男がありました。

或日の事、何かお魚を捕ろうとして、シリバの沖へやってました。

陸の方に一人の女が余念もなく昆布や海苔を取って居ます。

これはどうも見覚えのある様な姿です。

「似た人もあるものだなあ！」

と、ひとり呟きながら、思わず知らず磯辺近くへ舟を寄せて行きます。

見れば見るほど似て居ます。

おやつと思ひながら、尚も近づけばそっくり其のまま、否、全く其の人なのです。

「あっ！」

と奇声を放って棒立ちになりました。

それもその筈、あの日頃の思い出の種、死んだ最愛の妻が、寝ても覚めても忘れ得ない其の妻が、夢か現か知らねども、其処に居るので吃驚しました。

彼は疑う事も忘れて、

「おゝ、お前は！」

悦びの余り、自分の乗舟も打ち捨てて、陸の方へ躍り上りました。

「あれっ！」

と、驚きの声を立て、女は真青になって、昆布も海苔も投げ捨てて、一目散に逃げ出しました。

泣きながら逃げて行きます。

大つぶ石の多いシリバの渚を、妻はとても早く走って行きます。のめくりつまくり追い継り、

「おい、おおい待ってくれ。

何故あなたは逃げるのです？」

併し、必死の勢で走り行く女には追い付かれないのでした。

そればかりでなく彼女はシリバの洞窟の中にかけて込んでしまいました。

彼も無我夢中で続いて飛び込んで、奥へ奥へと追って行きます。

暗くはあるし嶮しくはあるし却々容易ではありません。

兎にも角にも一生懸命進みに進みますと、やがて薄明くなり、次第に明るくなって、別の世界に出来ました。

見まわすと、其処にはアイヌチセ（アイヌ家屋）も建ち並んで居ます。明白に此処はコタンです。

尚も不思議な事には、此の中には知った人が沢山居ます。

そして其の悉くが死んで了った筈の人達ばかりです。

彼女は泣き喚きながら、とある家に入りました。

よし、此の家だなど近寄りますと、恐しい二匹の白犬が彼に向つて牙を剥いて、今にも喰いつきさうです。

怖くて怖くて仕方がありません。

併し折角此処まで来て会わずに帰ってよかろうかと、犬に吠え立てられながらもやつとの思で、戸口に近寄り無理にも中へ入ろうとしました。

さあ、家の中では大騒動です。

「怖い！ 怖い！ 生きた人間が来た。

決して家の中に入れてはならない。」

と、堅く締切つてどうしても戸が開きません。

そればかりでなく、此の家の人々は恐怖の余り、彼を目かけて灰を浴せかけ、果てはイケマ（草の根、独特の呪）を吹きかけるのです。

これには堪りません。

併し、折角此処まで来たものを何とかして家の中へ入りたいたいものだと、表へ廻り裏へ廻りして居ます。

そしてカムイブヤリ（神窓）に立った時、エカシ（翁）の声厳かに、

「お前は何たる不屈者じゃ。

此処を何処と心得て居るか。

此処は黄泉の国ぢやぞ。

生きた者の来る処ではない。

死んだ人々が此の地に来て矢張生活するのじゃ。

生きた人間が決して決して来るべき処ではないぞ。

帰りなさい。さあ、早く帰れ。

それがお前の為だ。」

と、さんざんに叱られて、よんどころなく引き返す事になりました。

落胆と失望の彼はやっと、もと来た道を辿ってコタンに帰り、此の事の次第を人々に語りました。

其の後、間も無く病気になって儂く死んでしまいました。人間は死にますけれども靈魂は不滅であります。

シリバの洞窟から彼の世へ行きます。

そして其処そこで我々同様に生活します。

それから我々が死人を気味悪く感じ、幽霊を怖おそがる様に、彼の世の人々は現世の生きて居いる人々を恐れるのです……と。



今はシリパの「洞窟」も石が崩くずれて埋うもれて居いますが、之これをアイヌはオマンルパラ（死んでから行く道）と云いって居います。

神秘の洞窟オマンルパラは今でもシャモ（内地人）もアイヌも畏おそれ尊たつとんで居います。

間違まちがいにも此この前で小便でもしようものなら、神様からお叱ちりを受けて、山から石が不意ふいに落ちて来ると信じられて居います。

嗚呼ああ、シリパの洞窟、アイヌ衰滅すいめつと共に、幾多いくたの伝説も語る人なく、之これと運命を同じくして、遂ついには消失しょうしつするのでありましょうか。

渚なぎさに打ち寄せては砕ける濤なみばかりは、永劫えいごう変る事なく、昔を今にくりかへして居います。

鯨にしんの余市は伝説の余市です。

海から突立つったって居いる断崖絶壁中、北海遺第一の称あるシリバ山は、悠久ゆうきゆうなる日本海を前にして、其その男性的な勇姿ゆうしを神秘をこめる潮風に曝さらして居います。

烏と翁

自然のままに生活していたアイヌは、貯蓄ちよちくの必要もなかった程ほど、野にも山にも、川にも海にも日用品が満々まんまんとありました。

食うことだけは、心配のない時代、それは北海道の遠い昔のことでもあります。

いつもいつもこんな調子で海の幸山の幸に恵まれるものと安心していました。

ある年のこと、お魚は何んなにもとれない、鹿も獲れない。それから木の果みも草の根も、限かぎって不作といふ未曾有みぞうの大饑饉だいききんが、この不用意な原始社会にめぐりあいました。

それだけ人々は、びっくりしました。

ひもじい思いに死ぬ人も日毎ひごとに殖ふえて来ます。

ある日のこと、おじいさんがただ一人で海辺をぶらりぶらりあるいていました。

遙はるか向むこうのなぎさに「ピカリ」光ってるものが見えました。

「何だろう？」

いそいそと近寄って見ますと、波に打あげられた鮭チイチップでした。

晴れやかな旭日あさひを受けて銀鱗ぎんりんかがやいてゐるではありませんか。

お爺様は大そう喜びました。

今にもひろわんとしました時、はっと気が附つきました。

その鮭そぼの傍そばには、一羽の鳥バシクルがいて、おじいさんの来たのも知しっているのか、それとも知らないでいるものか、その鮭の頭を突ついています。

そして逃げようとしません。

よくみると、その鳥バシクルはまた今年のこの飢饉きぎんのためか、もう痩せて痩せて骨と皮ばかりで、見るも哀れな姿です。

逃げる元気もないらしいのです。

お爺さんはじっとみつめていましたが、可愛想で可愛想でなりません。

「鮭バシクルを拾いましてこの鳥バシクルに気の毒じゃのう。

鮭みつけを発見したのは俺より鳥バシクルの方が先だった。

つまり鳥バシクルのものだ。

そうだ鳥バシクルのものだ。

……でも全部はどうてい食べられまい。

そうだ」

と、ひとりいい独りうなづき、

「からすさんからすさん、どうぞこの鮭を半分私に下さいませんか。

あなたひとりで残らず食べられないでしょう。

だからどうぞ私に半分下さいませ。

お願ねがいでございませす」

ていぢよう

あいさつ

マキリ

くだん

鄭重ていぢように挨拶あいさつして、腰こしから小刀ことうを取とつて、件くだんの鮭さけを二ツふたつに身みおろし、そして半分はんぶんは鳥とりに、半分はんぶんは自分おれが貰もらつて、また「イライライケレ」まこと（真まことに有難ありがとう御座ございます）と、厚あつく御礼おれいを申述もうしべて鮭さけの片身かたみを持もつて吾家わがやをさして急いそいで歸かえりました。

おじいさんの家いへはこの村むらコタンでも一番いちばん貧ひんしい方で、子供こどももなく、いつも物憂ものうい生活くわんごをしている老夫婦らうふうでございました。

今いま、おじいさんが大おほしたおみやげを持もつて歸かえつたので、おばあさんの喜よろこびはひとかたではありません。

その夜よるは感謝かんしゃの祈いのちりを捧たげて休息きゅうししました。

ひっそりかんとした淋さびしいコタンも、白々しらじらと明あけ渡わたりました。

老夫婦らうふうは、さて夜よるがあけた、どれお起きおきやうか……としていいるうち、誰たれれやらの声こゑ、

「おじいさんおじいさん」

おや誰たれかが来きたようじゃ……

「おじいさんおじいさん」

「はい……誰たれですか」

「おじいさんおじいさん、私わたしは、きのうの鳥とりでございませす。

きのうは本ほん当とうに有難ありがとうございませす。

あなたの御親切は忘れられません。

ごおんがえ
御恩返しに私は何でもノイポロエクス（予感又は予言）をもつてお知らせ申します。

本日はコタンの浜に大きなフンベくじち（鯨）が漂着ひょうちやくいたしますから、早速村中さつそくむらじゆうの人をお連れして、お出かけなさい」

お爺様は大喜びで村中ふれまわりました。

一同はかんき歡喜の声をあげ、おじいさんをほめたたえました。

大きな鯨が沖の方から風と汐しおとに寄せられてくるんです。

これはこれは神様のお恵みめぐみであると喜びました。

それから村コタンの人アイヌは従来じゅうらいの敬虔けいけんな心もちにたちかえりました。

「カアカアカア」

外ほかの人には只ただこれだけより分りませんでした。不思議にも一人お爺様にのみ、からすの言葉がはつきり分りました。

よいことも、不幸なことも前もって鳥バシケルが伝えてくれるので、おじいさんは仕合せしあわせでした。

それから後は、村の人はおじいさんを誠に尊敬しました。

そしてイカシ（翁）イカシと称よぶようになり老後を楽しく暮したということであります。（完）

林檎の花の精

牛乳のような柔らかかみを帯びた空に夕陽が赤く流れる春の夕べ、美しい雲が往来して、そよ吹く風に林檎の花が銀の雪のように散った。

山に狐にでかけたコタン近くまで来た時には、日はとっぷり暮れてかすんだ月がぼんやり輝いて細長い野道を青白く彩っていた。

若者はほの白く咲いたりんごの木並びに差しかかった時、ふと誰かがつづいて来るように感じた。

若者ふりかえって見た。

けれどもそこには甘い匂いを漂わすりんごの木立ちが道の両側を囲むのみで、何の姿も見え出せない。

「何だろう？」

若者はつぶやきながら歩みつづけた。

けれど何となく恐怖しかかった。

彼は大声を上げて歌い出した。

それは恐怖から逃げようとする彼の可憐な努力であった。

洗練された美しい声が、静かな山道に反響して遠く消えて行く。

りんごの花がほろりと散る。

若者は一心に歌った。

けれど声かときれると、確かに何者かのかすかな足音が耳に入る。

ちようど宙を行くような軽い足音であった。

「あなた、あなた。」

水の垂たれるような声が、ふと夜の静けさを破つて聞えた。

若者はきよつとして声のする方を見ると、そこには世にも美し

い一人の女が立っている。

「私は先刻せんこくからあなたのお出いでを待っていました。」

と言つて、女は真珠のような齒を現わしてほほえみました。

「一体あなたは誰人たれびとです。」

若者は顫ふるえる声で訊きいた。

女は

「シノオマニイオチの娘です。」

わたしはあなたを思っていました。」

と言つて寄り添そつて来た。

若者は、それから後は夢見るような気持ちであった。

「今夜はこれでお別れしましょう。」

暫しばしくたつて女はしんみりと言つた。

若者はまだ熱にうかれたかのように、

「これから私と一緒に来て下さい。

そうしていつまでも離れずに居りましょう。」
と言う。

「今夜は行くことが出来ません。

十六夜の月が出たら迎えに来て下さい。」

「なぜ今夜はいけないのですか。」

「でも……。」

と女は言葉を濁した。

「では十六夜の月の出る時を待っていましたよ。

その夜、美しいあなたを、私はきつと迎えに来るでしょう。」

「ほんとうに……。」

「誰がウソを言うものですか。」

「堅くお約束いたします。」

「勿論ですとも。」

と若者は大きくうなづいた。

「わたし嬉しい……。」

と女は燃ゆるような瞳を若者の頬に寄せた。

若者は念を押して女の手を放すと、

「さようなら……。」

と女は言葉を残したかと思うと、雪と散るリンゴの花の中に、

姿を吸われるように消えてしまった。

若者は、あまりのことにぎよつとした。

そして恐怖を感じて鳥の翔けるように走ってコタンに帰った。

その出来事は嬉しい夢であり、恐しい夢であった。

女との約束を果たす気にはなれなかった。

十六夜の月はほのぼのと大きく輝いて、山からさしのぼった。

若者はしかし女のところに行こうとしなかった。

次の朝、白いリングの花に身を埋めて若者が冷たくなっておるのをコタンの人々が発見した。

熊と熊取の話

三百年も昔であつたら、人間の数も、熊の数も、あるい或は大差なかつたかも知れない。

熊、熊、熊！

これだけでも、荒涼たる、えぞ蝦夷が島をしの惣ばせて余りある程、熊と北海道は縁が深い。



石狩の浜増コタンに春は訪れた。はまます

カモメなく平和なコタンの人々はにしん鯨大漁の喜びに満ちて夜となく昼となく働いていた。

突如！おおぐま巨熊が現れて、平和な里におおい大なる恐怖の波紋を伝播して、ひらめく大漁旗の旗風にも人々は、熊の不安を直感したのである。

それは単なる、噂ではなかった。

はくちきゅう白昼出沒する数頭の熊は、かすニシン粕をひっくり返す、水に浸してをいた「キリコミ」(北海道名物すし鯨と共に独特な料理)を木桶のまま持って行く。

かずのこの俵を「たわらやつこらさ」とも何とも云わずに、ひっかついで悠々と山に運ぶ。

「危うきに近よらぬ」にわか君子は武者ぶるいしているのみで誰ひとり働き手がない。

親方（漁場の主人）は、とほうに暮れていた。

「この熊を退治する者はないか」と。

その頃、上場所（石狩や後志方面）で鬼と呼ばれた剛傑、与兵衛と云うアイヌの青年があつた。

（積丹の来岸の人で当時小樽港に石工をしていたのだ）

「与兵衛を頼む」より上策はないと親方は早速、与兵衛を呼び寄せることになった。

走せ参じた与兵衛は、巨熊一頭を射止めた。

その次の日も一頭、また一頭……。人々は与兵衛の手腕に驚き、また信頼した。

出る熊、出る熊皆んなやつつけたので、その後だんだん現れなくなつた。

——人々は今まで後れかした仕事を取りかえす意気込みで一せいに働き出した。

熊が出ないかと、毎日の様に与兵衛は歩哨に立っていたので人々はやっと安心した。

こうして十数日を過ごしているうち、怖ない話も、忙しい仕事に追われて、いつしか忘れられていた。

ある日の事、番人（支配人又は番頭）が所用あつて倉庫に入ったが、間もなくキャツと声をあげて逃げて来た。

「ヨツヨツ与へ与兵…」

ろくろく口もきけなかつた。

「タ大ツ大変だツ おやじ（熊のあだ名）がローカ（倉庫）に寝ていた……ハヤクハヤク」

「そうでしたか、ようございます」

と与兵衛は倉庫の戸を堅くメ切つて、窓もしつかりメ切り、どこからも熊が出られないようにして置いて、其の日は熊退治に倉庫に入らなかつた。

人々はなぜ明るいうち熊退治せないだらう？

「きつと与兵衛も怖かなくなつたんだべエ」

と、口々に云つていました。

与兵衛はめしを食つて昼寝する。

——日の永い春の日も、とつぷり夜のとばりに包まれて、あやしく光る月影を、夜なく鷗の海に落とした頃、与兵衛は、そつと寢床をぬけ出してオンコの木の弓（三尺五六寸）に毒矢をつがえ、只一人 件の倉庫へと忍んで行った。

ばんや（漁舎）では与兵衛の今出て行ったのは、それとさどつている者の中にはあつたが？ 夜は静かである。

こつそり戸を開けてそつとしめてローカの中に黒影が忍び入った。

与兵衛である。

自衛の本能が発達している熊は、第一に目が早い。

第二に耳が敏活びんかつである。

第三に嗅覚が鋭いのである。

だから此この際 侵入者のあったことは無論一むろん知っていたに違いない。

たとえ物蔭ものかげに忍びよるとも、その微かすかな音を聴きわけ かぎわけ
て……そして見つかったら最後だ。

一步はぬき足、一步はさし足……。

暗い暗い暗闇の、そして広いローカに猛獣あの在りかを探ねて……。

赫カっ！！

と、燃え上った火の玉二ツ？ と見えしは、正まさしく熊の眼光である。

満月に引きしぼられた半弓はんきゆうから、

フッ！

と、離れた矢はあやまたず、火の玉一つをかき消した。

俄然がぜん、天地をゆるがし咆哮ほうこう一声、

ドーシン！！！！

熊は倒れた。

烈火れつかと燃ゆる火の玉一つが、憤怒ふんぬの力、ニシン粕かすの俵たわらをはねのけ、すざまじい勢いきおいで与兵衛目がけて飛びかゝった。

流石さすがは与兵衛、早くも第二の矢は、急所にグザツとばかり立つてゐた。

ドタンバタン、ドツシーン。

怒号どごうして何物かを、かちる音が

ガリツガリツ

と妖音ようおん暗夜あんやに漂ただよふ。

——戸外こがいにさつと走り出でた与兵衛、

「おゝいおい——鬼熊おにくま首尾くよく克く打ちとつた！！　カンバのあか

り持って来——い」

大音声だいおんじやうによばゝれば、かばの木の皮のたいまつを手に十数人が

倉庫にやって来た。

ガリツ：グワリツ……ウヲフウヲヲ……

「そらッまだ生きてら……ワアワア……」

と、逃げかゝるを、与兵衛は呼び止め

「心配するなもう大丈夫だ、どれどれたいまつを一つ貸してくれ」

熊とどに止め矢をモー一本射うって——其の夜はそれで休んだ。

ナゼ昼に入らずに夜行ったんだらうと人々は考えてもみたが、
与兵衛の剛胆ごうたんと智謀ちぼうに敬服した。

……その後も数頭の荒熊あらくまを獲とったので、誰れ云いうとなく、鬼熊
与兵衛と云いわれる様ようになった。

(与兵衛の妻は鬼神とも歌はれた女傑じょけつで夫婦そろって巨熊おおぐまを退治したと
云いう珍談ちんだんも豊富だが、いづれ機会をみてお話し申しますが今でも上場所
六十才以上の人にはたいいてい知られている。それは単に強いばかりでなく、
弱いアイヌの中に珍めずらしくも男子氣おとこぎがあったのだから)



さて、与兵衛の話、それは去年やおどどしの話ではない。
実に今を去ること七十年も昔のことである。

ならば今は我わが北海道に熊はいったいどれ位居ぐるであろうか？
永劫えいごうこの通り変かわるまいと思わせた千古せんこの密林も、熊笹くまざさ茂る山野
も、はまなしの咲き競きそう砂丘も、皆みなんな原始の衣ころもをぬいでしまっ
た。

山は畑地に野は水田に、神秘の溪谷けいこくは発電所に化ばけて、二十世
紀の文明は開拓の地図を彩色さいしきしてしまった。

熊、熊！ 野生の熊！！

その熊を見たことのある現代人は果はたして幾程いくほどかあるであろう
か？。

——本道人は千人に一人も熊をみたことがあるだろうか？。

内地の人に聞かせたい。

私の父は熊と闘ったために、全身に傷跡が一ぱいある。

熊とりが家業だったのだ。

弓もある、槍もある、タシロ（刃）もある。

又鉄砲もある。

まだある、熊の頭骨がヌサ（神様を祭る幣帛を立てる場所）にイナ

ホ（木幣）と共に朽ちている。

それはもはや昔しをかたる記念なんだ。

熊がいなくなったから……。

「人跡未到の地なし」と迄に開拓されたので安住地と食物とに

窮した熊は二、三の深山幽邃の地を名残に残したきり殆んど獲り

尽くされたのである。

——熊が居なくなった。

本場であるべき吾北海道なのに「熊は珍らしい」と云ったら、

内地の人は本当にするか？。

熊の話

熊の話をせよといふことであります。

一体アイヌと申しますと、いかにも野蛮人の様に聞えます。

アイヌの宗教は多神教であります。

万物が凡て神様すべであります。

一つの木、一つの草、それが皆んな神様みであります。

そこには絶対平等——無差別で、階級といったものがありません。

ん。

私の父は鯨にしんをとったり、熊をとったりして居おります。

この熊をとるといふことは、アイヌ族に非常によろこばれます。

といふわけは、熊が大切な宗教であるからであります。

熊は人間にとられ、人間に祭られてこそ真の神様になることが出来るのであります。

従って、熊をとるといふことが、大変功德になるのであります。

その人は死んでからも天国で手柄になるのであります。

そういうわけでありますから、アイヌは熊をそんなに恐れませ
ん。

私の父、違星いぼしじんざく甚作は、余市おに於ける熊とりの名人です。

何でも十五六年も前のことでした。

こんな時代になると、熊取りなんどという痛快なことも段々出来なくなるので、同じ余市の桜井弥助さくらいやすけと相談して、若い人達に熊取りの実際を見せるために、十四五人で一緒に出掛けて行きました。

三日間も山の中を歩き廻まわりましたが、一頭も出会いませんでした。

今年父は五十幾いくつになつて居おります。

当時は四十代でありましたから、なかなか足が達者でした。

弥助も足が達者でした。

木の下をくじるとか、雪の上をカンジキはいてあるかしては、とても二人にならんで歩く様な人はありませんでした。

いつでも二人に遅れ勝がちで、二人は一行を待ちながら歩くといつた具ぐ合あいでした。

シカリベツという山にさしかかりました。

弥助は西の方から、父は青年をつれて南の方からのぼりました。例によつて父は一行にはぐれて歩いて居おりました。

所ところが父の獵犬が父の前に来て盛んに吠え立っています。

父はすっかり立腹して了しまつて、金剛杖クワツで犬をたたきつけました。犬はなきながら遠ざかつて行きました。

程ほど経へて父の前にやつて来て、また盛んに吠え立っています。

狂犬になったのではないかと心配しながら又たたきつけますが一寸後へ下るばかり、盛んに吠え立っています。

今まですっかり気の附かなかった父の頭に、熊でも来たのではないかしらという考えが、ふいと浮んだので、ふりかえって見ると、馬の様な熊がやって来て居りました。

それはもう鉄砲も打てない近い所に、じりじりと足もとをねらって居るのです。

咄嗟とつさに父はクワを雪の上へ突立つきたてました。

熊は驚いて横の方へまわって、尚なおも足元をうかがって居おります。

この間、鉄砲に弾を込める暇がありませんでした。(三日間も山を歩いたが熊に出会はずだったので、鉄砲には弾を込めてなかったのです。

弾を込めたまま持って歩くということは可成り危険ですから)。

父は鉄砲で熊をなぐりました。たたきました。

その勢いきおいで熊は一回雪の上をとんぼりがえりしました。

父は一旦後いったんあとじさりして、鉄砲に弾を込め様ようとしましたが、先刻せんこく熊をたたきつけた際に故障が出来て了しまって弾が入りません。

熊は今度は立って来ました。

大きな熊でした。

父は頭から肩先をたたかれました。

(この時父は太刀タシロを抜くことをすっかり忘れて居いたと申して居

ります）。

ねぢ伏せられて父は抵抗しました。

格闘しました。

後からやって来た十二、三人の連中は、これをどうすることも出来ませんでした。

もし手出しをしようものなら却かえって自分達を襲かって来きはしないかといふ懸念けねんがありました。

ただ茫然として、遠巻きにこれを見ているより外ほか、仕方しかたがありませんでした。

弥助のやって来るのを待ちましたが、弥助はなかなかやって来ませんでした。

父の防寒用の衣類も此この際余り役さに立たず、頭、顔、胸をしたたかかみつかわれました。

父は熊の犬歯けんしの歯の無い所を手でつかまえて尚なおも抵抗を続けて居おりました。

この時、山中熊太郎という青年が、熊に向って鉄砲を撃つ者はないかと一同にはかりましたが、誰も撃とうとはしませんでした。

熊に向むかって撃った鉄砲が却かえって格闘している人間に当りはしないかといふ心配がありましたから。

と見ると、父は最早もはや、雪の中へ頭をつつ込んで、防寒用の犬の

皮によつてのみ、熊の牙からのがれて居りました。

一同は思ひ切つて後の方から一斉に鯨波とぎの声を挙げて進んで行きました。熊はびつくりして後ろをふりかへりました。

そして人間の上を飛び越えて逃げて行つて了しまひました。

実際、弥助のやつて来るのは遅くありました。

皆んなの介抱で山を下りました。

それから大分長い間医者にかゝつて居りました。

所で、それ程の大傷が存外早く癒なおつたことを特に申し上げなければなりません。

それはアイヌの信仰から来て居るのであります、つまり熊は神様だ、決して人間に害を加へるものではない——といふ信仰が傷の全治を早はやからしめるのであります。

かうした場合、アイヌの宗教上、アイヌは熊をのろいます。

そして、熊をのろう儀式が行おこなわれるのであります。

其その後、父は熊狩りに懲こりたかと申しますのに決してそうではありません。

大正七年の「ナヨシ村」の熊征伐を初めとして、その他にも屢々しばしば出掛けて行きました。

先程も申しました様に、熊は人間にとられ、人間に祭られてこそ、初めて真の熊になるからであります。

皆さん、お忙しい中をお聞き下さいまして有難う御座いました。
その他色々面白い話もありますが、今晚は大分遅くなりましたので、これだけにして置きます。有難う御座いました。

——
鳩里筆記
——

句誌にひはり 大正十四年七月号